

トッカータの楽曲分析を通して、バッハの音楽に触れる

市立 ○○○○ 高等学校 ○○ ○○ (音楽科)

1 はじめに

本校は、学年8クラス中、普通科7クラス理数科1クラスで、平成21年度より進学重視型の単位制に完全移行した。芸術は、音楽・美術・書道の3科目からなり、普通科は一年次で「芸術Ⅰ」を必修選択、二年次での「芸術Ⅱ」は家庭科と合わせて4科目からの選択となる。三年次においてはⅠ類型（文系）・Ⅱ類型（理系・数ⅢCなし）・Ⅲ類型（理系・数ⅢCあり）の3つのコースのうち、Ⅰ類型にのみ「芸術Ⅲ」または「芸術Ⅱ（二年次で家庭科を選択した者）」の選択ができる。複雑なカリキュラムの中、三年次で芸術を選択する者は少なく、10名に満たない程となる。理数科は一年次で「芸術Ⅰ」を必修選択したのち、三年次で「芸術Ⅱ」を選択可能だが、こちらも多くの教科の中での選択となるので、あまりいない。

1日45分×7時間という日程で、日々追われるように学校生活が過ぎていくが、生徒は生き生きと、何事にも興味関心を絶やすことなく活動している。学ぶことも行事も、学校生活全般に対し、楽しみながら全力で取り組むことができる。そして常にお互いに高め合うことを忘れない。

音楽選択者は、歌唱・器楽それぞれ得意不得意はあるが、皆何かしら必ず身につけようと一つ一つのことに真剣に取り組む。1年生の器楽は、マンドリンがメインで1年間通して練習を進めていく。最終的には、マンドリンアンサンブルのグループ発表を行う。各グループの創意工夫がこらされた演奏や演出が毎年楽しみである。2年生には合唱コンクールという大きな出番がある。学校行事として毎年2月に行われ、1・2年生の全クラスが出場し、賞を競うのだが、審査結果集計の間に2年生音楽選択者全員での合唱を行う。総勢70名程の大合唱である。このために授業では3か月程かけて練習を積む。ここ近年はモーツァルトのレクイエムなど大曲に取り組んできた。音域が広く、どのパートも困難があるが、難しいものにこそ意欲的になるのが市千葉生の特徴ともいえる。指導する側も色々と覚悟が必要である。3年目の履修となる「音楽Ⅲ」を選択する生徒は例年3～5名程度しかいないが、非常にレベルが高く、高校以上の授業が成り立つ。音楽系の進路を考えている者や、受験とは関係なくとも選択する者など様々だが、皆心から音楽を愛する者ばかりでとても充実した時間を過ごすことができる。生徒のさらなる能力の向上を目指して、日々挑戦である。

2 研究内容

[チェンバロという楽器について理解を深める]

(1) 音色の鑑賞 *平均律クラヴィア曲集より第1番プレリュード

・まず、チェンバロの音色を感じとってもらうため、比較的耳慣れた短めの曲を鑑賞し、曲の感想ではなく、音そのものの印象を直感で書かせる。生徒は様々な言葉で表現するので興味深い。

(例：金属音みたい、ギターに似ている、冷たい感じがする、他)

(2) 楽器の呼び方

独・伊→「チェンバロ」、仏→「クラヴサン」、英→「ハープシコード」と様々だが、すべて同じ楽器であることを説明する。

(3) ピアノとの違い (*板書と説明)

グランドピアノと似たような形をしているが、大きさはチェンバロの方が小さく、強弱も出にくい。そのため、鍵盤も二段となっているものもある。

鍵盤を弾くと弦を爪(材質は鳥の羽軸またはプラスチック)がひっかけて音が出るしくみになっているので、鉄の弦をハンマーでたたくピアノとは全く構造が異なる。演奏が終わると、最後の音がなくなる時、「カチッ」と爪が戻る音がよくわかる。トリル奏法が多いのは、ピアノのように一つ一つの音をペダルでのばすことができないためである。

音量も小さく、サロンコンサート向きである。側面やふたの裏側などに華やかな装飾が施されているのは、観客が近いため絵画を観るようなイメージで作られており、一方鍵盤の白黒がピアノと逆なのは、弾いている手を美しく見せるため、と当時ならではの工夫がなされている。材質上ひととき湿気に弱く、場合によっては音が出なくなることもある。

[トッカータ短調 BWV 9 1 4 を鑑賞し、楽曲分析を通して曲の構造についての理解を深める]

(1) 「トッカータ」について理解を深める (*板書と説明)

トッカータとは、16世紀末頃からの鍵盤楽器(=チェンバロ)のための曲。鍵盤上の華やかな技巧が特徴。今回鑑賞する、9 1 4番は、9 1 0番から9 1 6番の7曲中の1曲であり、男性的でシンプルな旋律が聴きやすい。

(2) 「BWV」について理解する

BWVとは、「Bach(バッハ) — Werke(ヴェルケ) — Verzeichnis(フェアツアイヒニス)」で、「バッハ作品目録」の意味である。他にも、「KV(ケッヘル)」はモーツァルト、「Hob.(ホーボーケン)」はハイドンなど、様々である。

(3) 4つの形式について理解する

トッカータは、「前奏」「第1フーガ」「間奏」「第2フーガ」の4つの部分からなっている。全体を通して大きく2つに区切ると、「前奏・第1フーガ・間奏」→前半部分、「第2フーガ」→後半部分となる。第2フーガは曲の最後を飾るべく、華やかで演奏時間も長い。

(4) 全体を通して鑑賞する

曲の内容を理解する前に一度通して鑑賞する。それぞれの部分での印象をメモしながら聴く。

(5) 前半の3つの形式の特徴を理解する (*プリントにある各部分の冒頭をピアノで弾き、テーマとなる旋律を認識させながら、板書と説明を加える。)

「前奏」・・・荘厳な雰囲気。メロディラインがシンプルなのは、この曲全体のテーマのような役割をしているため。

「第1フーガ」・・・重なり合う数多くのメロディが、人がヒソヒソと話をしているような様子を表現している。

「間奏」・・・この部分はバロック音楽の特徴的な作りをしている。この「間奏」は、当時の楽譜ではコード(和音)しか書かれておらず、演奏者が即興でメロディを弾いていた。今でこそメロディが書かれているが、リズムや速度が一定していないのはその名残とも言える。始まりは穏やかだが、次第に劇的になり、クライマックスの第2フーガへと続く。

(6) 後半の「第2フーガ」を分析する *研究授業

① 8回のテーマに蛍光ペンでマークする

楽譜には、すでに8回のテーマの部分に番号が書いてあり、カッコでわかるように記されている。ひとつずつその位置をピアノで弾いて確認しながら、生徒には蛍光ペンで色づけをさせる。これで、テーマの存在が瞬時にわかる。

② 8回のテーマの中で、1つだけ異なる性質の旋律はどこかを考える（板書・説明）

楽譜を見て考えさせるが、どうしてもわからない場合は4回目と5回目をピアノで弾き、比較して考えさせる。その結果、5回目の旋律だけが「山型」の音型であることがわかる。

8回中ほぼ中央に位置する5回目のテーマは、全体の音（旋律）も少なくなる部分で、音型の違いをよりはっきりと感ずることができる。よってさらなる叙情的な効果も加えられる。

(5回目のテーマ)

(他)

③ 各テーマの特徴について理解する

旋律の動きや表現など、一つ一つピアノで弾きながら説明をする。

[1] この曲のテーマの旋律を提示する役割があるので、わかりやすくはっきりと出てくる。

[2] 6度のハーモニーで始まり3度で終わる。「6度」という音程は人が一番心地よく聴くことができる音程で、次が3度である。自然と聴き入ってしまうのもこの効果かもしれない。

[3] 2回目とは逆のハーモニーで、3度から6度が変わる。

[4] 高音域で単旋律になり、すっきりとした印象を受ける。

[5] 4回目の変化をきっかけとし、メロディラインが山型に変わる。4回目に引き続き、すっきりとした単旋律であることとほどよい音域が、せつなさを感じる程に叙情的である。

[6] 初めて低音域に現れる。

[7] 曲の最後へ向かう準備を思わせる部分。音も細かくなり雰囲気を盛り上げている。

[8] オクターブ使いでダイナミックな印象を与え、最後を華やかに飾る。

④ 8回のテーマの共通点を見つけ、アフェクテンレーレについて理解を深める。

まずは楽譜で旋律の流れを見て、考えさせる。ベース音がわかりやすく聴こえるように、ピアノで各旋律を弾く。最後に、楽譜上の☆印がヒントになることを伝える。以下のことを板書して認識させる。また、調のもつ性格については、二短調を例に板書した後、ホ短調を生徒に想像してもらった内容を書かせてから、板書する。

「全てのテーマに共通していること」→ベースの半音下り（*改めてピアノで弾いて確認する）

完全4度の幅で下行する音型→「嘆き」を表す

低音で半音下行6音型→「嘆きのバス」と呼ぶ

喜怒哀楽を「アフェクト（情緒）」といい、これを表現するのにどのような音楽がふさわしいかなどを探究する音楽家が多くいた。（マッテヅンなどはその中心的人物である。）探究

された内容は「アフェクテンレーレ (情緒論)」と言われた。例えば、狭い音程は「悲しみ」を表し、広い音程は「喜び」を表す、など多くの探究がなされた。マッテゾンらは、調による様々な性格の違いも見出した。

例：「ホ短調」→深く沈み、悲しげな状態を作り出す。

「ニ短調」→信仰深く、穏やか。高貴で満ち足りた性格。

(マッテゾン著「新設のオーケストラ」より)

*マッテゾンについて・・・ドイツの作曲家。オペラ歌手だったが、難聴になったため執筆活動に転向した。

(7) バッハの音楽の背景を理解して、鑑賞のまとめとする (*説明・板書)

「拍子の確立」

ルネサンス時代は声楽曲が中心で、アクセントは歌詞の抑揚に合わせて決まっていた。バロック時代には、舞曲の影響で規則的なアクセントが意識されるようになった。

「調性音楽の誕生」

ルネサンス時代の12種類の旋法のうちの2つが、バロック時代に、長音階(イオニア)・短音階(エオニア)として残った。

「バッハ一族は代々教会音楽家(ルター派)」

(カトリック)

(プロテスタント)

信者の祈りを教会が仲介して神へ届ける

信者が神に直接祈る

*マルティン・ルター 「音楽は神からの贈り物」

- ・カトリック教会を批判し、宗教改革を起こした。
- ・教会オルガニストの地位を上げた。(→牧師に次ぐ地位まで)

これらのようなことも、後にバッハの音楽にロマン派音楽に通じるような濃密な感情表現を発見して感動した背景の一つといえるであろう。

(8) アンサンブルの中でのチェンバロの音色を鑑賞する

トッカータの鑑賞を通してチェンバロを理解した上で、他の様々な楽器との演奏の中でのチェンバロの位置を認識し、その音色の違いを感じる。感想をプリントにまとめる。これは学校教育指導の指針にある「言語活動と体験活動の充実」を意識して行った。

(鑑賞曲)

- ① バッハ作曲「アンダンテ」(リコーダー・チェンバロ)
- ② バッハ作曲「アダージョ」(フルート・ヴァイオリン・チェンバロ)
- ③ ヴィヴァルディ作曲 ヴァイオリン協奏曲「四季」より第2番「夏」第3楽章(弦楽合奏)

特に③は、大編成の中のチェンバロの役割はこれまでとは明らかに違うので、チェンバロ音を探し、それを全体で感じることは、とても新鮮だったようである。以下、生徒の感想の1例である。

[感想]

①春っぽいなど直感で思いました。更にリコーダーが入ってくことでやわらかさやあたたかみが加わり、今まで聴いていたチェンバロの曲とはうって変わり、優しさが伝わってきた。チェンバロの硬い感じや金属っぽい感じとリコーダーのあたたかみが合わさってとても心地よく、流れるような音楽で癒された。

②跳ねるようなウキウキ・ワクワク感が伝わってくる。フルートのやわらかな音とヴァイオリンのピッチカートとチェンバロが合わさってあたたかくなった。ヴァイオリンがメロディの時は深さがあり、ちょっぴりさびしい初恋みたいなイメージを持った。それぞれの楽器がメロディの掛け合いをしている時はバツハっぽくきれいな旋律で「深い」と思った。全体的に「START」的なイメージを持ち、なぜかやる気が出た。終わり方が印象的だった。

③チェンバロわかった！！！！とにかく激しくていつものメインのチェンバロも（この曲では）あんなけなげに演奏していて、なんかかわいかった。この曲すごい好きだなと去年も思い、なぜかipodに入れたのを昨日のここのように思い出します。悲しみを超えて怒りに変わっていったようなイメージを持った。激しいところも好きだけど、チェンバロが聴こえてきた少し静かな所も哀愁があっていいなと思った。

(9) トッカータの楽曲分析をもとに、バッハの音楽をグループごとに分析し、発表する（*調べ学習9時間、最終時間に発表しレポート提出）（*次ページにレポートの1例）

・各クラスの四部合唱をする際の4パートでグループとして分かれ、以下の4曲を各々割り当てる。（4曲提示して、順に選んでもらう）

①G線上のアリア ②主よ人の望みの喜びよ ③平均律クラヴィア曲集より、第1番

④3声のインヴェンションより「ハ長調」

・調べる内容は、「テーマがどのように存在するか」等、トッカータを分析したような方法での楽曲分析を中心に、音楽の特徴や作曲の背景などを「B4用紙3枚以上+楽譜のコピー」の状態にまとめ、全員の前で発表する。

この選曲については、耳慣れているものと、1曲が短く初めて聴いても比較的 analysis しやすいと思われる曲と考え、以上の4曲を提示した。しかし実際には、同じメロディの繰り返しで分析内容に限界があったり、資料が十分でないものもあり、苦労したグループもある。選曲は毎年変える必要があるかもしれない。

やはり自分たちだけで分析することはかなり難しかったようであるが、多少のヒントによりそこからの探究心が高く、何度もCDを聴きながら楽譜をチェックしたり、学校にある資料をすべて使って調べ上げ、なんとか説明できるだけのレポートを仕上げることができた。

【分析】

③ 短歌の
4声合唱
④ コーラス
弦楽器

4分の3拍子の器楽前奏が先行するが、
低音弦の力強い足取りに支えられた
オーボエのうたが連符の動きの
美しさをたええようもなく、
このコーラスを流れていく。
深い感銘を与えている。

本来の編成は、いたってシンフォニカル。
4声の合唱、弦楽器とトランペット、オーボエ。

原曲では
2声合唱が
4声合唱

この原曲では
2声合唱が重畳
というよりも重畳
な響きとある音(●)と
7拍子の音(○)が交代する
韻律を持つ。

4声合唱は
「エエを信じて足れり、わが心は信じて」
(第2部のコーラスでは
「エエはわが歌ひ、わが心の慰め願し、」
と一符対一符の単音楽的構成のうち、
力強く歌いだし、
オーボエの軽やかな連符の動きと
対照的な表現効果を獲得している。

同じ構成で続くが、
1長調から1短調(右)、
1長調(右F)へ転調。
Eして、再び1長調に戻る...

全体は
3連符のモティーフ①と
4声合唱によるコーラス②
2つの構成要素の対。

4声合唱も
ほらと似た形を
奏せられる。

- 1 日時・場所 平成22年11月8日(月)第4限 音楽室
- 2 学 級 2年CD組(男子14名 女子7名 計21名)
- 3 学 級 観

芸術的な能力に富んだ生徒が多く、何事もより高いものを目指して努力することができる。歌唱であればより良い発声を心掛け、鑑賞であればその曲のもつ世界へ没頭するなど、すべての活動に真摯に向き合うことができる。2学年の芸術は2クラスずつの3講座となっており、各々20～25名程であるが、男女比にばらつきがある。またクラスによってカラーが異なり、元気いっぱいのクラスもあれば、おとなしく消極的なクラスもある。このクラスは取り組み方にめりはりがあり、まとまりが良い。

4 題 材

～トッカータの楽曲分析を通して、バッハの音楽に触れる～

鑑賞 バッハ作曲「トッカータBWV914」

5 教 材

- ・音源資料(「ヨハン・セバスティアン・バッハ」チェンバロ：グスタフ・レオンハルト)
- ・学習プリント

6 題材設定の理由

バッハの音楽は「バロック音楽」とひとまとめにできない独特なものである。その内容は、非常に緻密で形式的であるのに、スッキリとわかりやすく、しかも情緒的に仕上がっている。楽譜を読み込んでいくほどにバッハの世界が広がり、時代背景や他芸術との関わりにまで進んでいく。

中学校などでは、壮大なオルガン演奏による「トッカータとフーガ」や「小フーガ短調」といった曲が教材としては広く知られるところであるが、高校の教材として、また探究心旺盛な本校の生徒に向いている楽曲は何だろうと考えた。

「トッカータ」は鍵盤楽器の音楽としては代表的であり、BWV914は、910～916の7曲中、各々の形式やメロディラインがわかりやすく、ホ短調の特徴も感じとることができる。

楽曲を分析し、しくみを理解することで、さらに興味・関心がわく。そしてバッハの音楽のみならず、ロマン派などの他の音楽に対しても主体的に楽曲分析をする力がつく。この1曲だけでもバッハの奥深さを感じることができ、まさに「音楽の父」と呼ばれていることが実感できる。

このようなことから、学習指導要領にある「音楽を形作っている要素を知覚し、それらの働きを感受して鑑賞すること」「楽曲の文化的・歴史的背景や作曲者および演奏者による表現の特徴を理解して鑑賞すること」「声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取って鑑賞すること」などの内容において適していると考えた。また、「生きる力」を育成する上での「言語活動」を充実させるという意味においても、この鑑賞で深く関わることができると思い、この題材を設定した。

歌唱などによる表現活動が中心となりがちな今日、主体的に鑑賞をすることによって、繊細に感じる心、豊かな情緒を育みたい。

7 題材目標

- ・味わい深い鑑賞をするために、楽曲分析する力をつけ、その楽しみを知る。

- ・ 楽曲を形づくっている要素を知覚し、曲の持つ美しさや緻密さなど、奥深さを味わう。
- ・ 文化的・歴史的背景や、作曲者の表現の特徴をよく理解し、その効果を感じとる。
- ・ 楽器の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取る。

8 指導計画

第1時 目標「楽器のしくみを理解し音色の特徴を捉える」

「楽曲の全体の構造を把握し、前半部分の形式と表現の特徴を感受する」

- ・ チェンバロの音色そのものの第1印象を個々にプリントに記入し、数名に発表させる。
- ・ チェンバロの音の出るしくみをピアノのしくみの違いと比較し、認識する。
- ・ トッカータの全体の流れを把握する。
- ・ 形式について理解し、前半部分の特徴や表現内容などを細かく理解させる。

第2時（本時）

目標「第2フーガの楽曲分析をし、楽曲を形づくっている要素や表現上の効果を認識する」

「楽曲分析をする楽しさを知り、バッハの音楽へ興味・関心をもつ」

- ・ 8回出てくるテーマをペンでマークし、どこにテーマが位置しているか見やすくする。
- ・ 8回の旋律の相違点・共通点、またそれらが意味するものについて考え、理解する。
- ・ 各々の旋律の特徴や表現上の効果を理解する。

第3時 目標「文化的・歴史的背景や、調の持つ性格、表現の特徴などを理解する」

「演奏形態の変化による表現上の効果の違いを鑑賞する」

- ・ マッテゾンによる、「アフェクト」「アフェクテンレーレ」や、調性の特徴について認識する。
- ・ 他の楽器とのアンサンブルの演奏を何曲か鑑賞し、役割や表現上の効果の違いを感受する。

第4時～12時 目標「他の楽曲を用いて、主体的に楽曲分析をする」

- ・ トッカータの楽曲分析を参考に、自分なりの楽曲分析をする。
- ・ 楽曲を4曲提案（鑑賞）し、各パートごとにグループを作り、研究する曲を選ぶ。
- ・ 分析内容をレポートにまとめ、発表する。

9 評価規準

	観点① 関心・意欲 ・態度	観点② 芸術的感受や 表現の工夫	観点③ 創造的な表現 の技能	観点④ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	楽曲に興味・関心を持ち、主体的に関わろうとしている。	楽曲の形式や内容、表現上の効果を存分に味わうことができている。	楽曲分析に積極的に取り組むことができている。	楽曲への理解を深め、個性豊かに鑑賞している。

具 体 の 評 価 規 準	(ア)特殊な音色やメロディ、楽曲全体の構成に興味・関心を持っている。	(ア)楽曲の各々の形式や、作曲者の心情・時代背景をふまえた内容を理解している。 (イ)叙情性のある独特な旋律など、表現上の効果を存分に味わい、積極的かつ個性的な言葉を用いて表現している。	(ア)楽曲を主体的に分析し、自らの言葉で表現しようとしている。	(ア)楽曲を形作っている要素や、それらの働きを主体的に鑑賞している。 (イ)歴史的背景や、作曲者の表現の特徴を理解して鑑賞している。 (ウ)特徴ある音色や形式、その表現上の効果を受・認識し、個性豊かに鑑賞している。
---------------------------------	------------------------------------	--	---------------------------------	---

10 本時の指導計画 (2/12時)

本時の目標

「第2フーガの楽曲分析を通して、楽曲を形作っている要素や表現上の効果を認識する」

「楽曲分析する楽しさを知り、バッハの音楽に興味・関心をもつ」

	学習内容	学習活動	指導上の留意点及び評価 (*)
導 入 10 分	前時の復習 本時の目標について共通理解する	<ul style="list-style-type: none"> 前時のプリントを見直す。 ひと通りトッカータを鑑賞する。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時に学んだこと(曲の前半部分について)を簡潔に説明する。 全体の流れを改めて把握する。
展 開 30 分	8回のテーマがどのように存在するかを確認する 1つだけ異なる性質の旋律はどこか、考え、認識する 各テーマの表現の要素を理解する 8回のテーマの共通点について理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> 楽譜を見て、8回あるテーマの旋律を確認しながら、蛍光ペンでマークする。 よく楽譜をみて考える。 5回目のテーマがポイント部分であることを認識する。 各テーマの特徴について理解する。 (前述とは逆に)全てのテーマに共通していることは何か、考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 1回ずつ楽譜上の場所をピアノで弾きながら確認していく。 色づけすることでどの位置にどのような形で存在するかをわかりやすくする。 8回全てを見てわからない場合、4回目と5回目を比較して考えさせる。 何名か指名する。 5回目の旋律だけが「山型」の音型になっていることを、ピアノを弾きながら説明し、表現上の効果も理解させる。 *観点②—イ、④—ア 音程や表現内容など、各テーマの特徴を、ピアノを弾きながら説明する。 まずは楽譜をよく見て、考えさせる。 ベースの音がわかりやすく聴こえるようピアノで各々の旋律を弾く。 ☆印がヒントになることを伝える。

	<p>「嘆きのバス」について理解する</p> <p>「アフェクテンレーレ」について理解する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ベースとなる音が半音階的に下っていることを認識する。 ・完全4度の幅で下行する音型は「嘆き」を表し、低音での半音下行6音型は「嘆きのバス」を表すということを理解する。(プリントに記入する) ・当時の表現上の効果に関する言葉について理解する。↓ (プリントに記入) 喜怒哀楽→「アフェクト」(情緒) 「アフェクテンレーレ」(情緒論) 	<ul style="list-style-type: none"> ・何名か指名する。 ・全テーマの半音階的な下りがわかりやすいようにピアノで弾いて確認する。 *観点④—イ ・引き続きピアノでベース部分のみを弾きながら、「嘆き」や「嘆きのバス」について説明する。(板書する) *観点④—ウ ・板書しながら説明する。 ・マッテゾンについても簡単に説明する。
まとめ 5分	<p>第2フーガを通して鑑賞する</p> <p>次回の予告</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容を振り返り、感じたことをメモしながら鑑賞する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時に学んだ「嘆きのバス」などの表現効果から、次回は調の持つ性格や、アンサンブルの中でのチェンバロの役割などを学ぶことを予告する。

*参考文献

- ・もう一度学びたいクラシック (西東社)
- ・[新音楽鑑賞法]名曲に何を聴くか 田村和紀夫=著 (音楽の友社)
- ・図解雑学 バロック音楽の名曲 皆川達夫=監修 宮崎晴代=著 (ナツメ社)

おわりに

「頭の中がモヤモヤしている」この曲の分析前の生徒の感想である。

大学時代にこの曲に出会った時は、教材としてここまで発展するとは夢にも思わなかった。試行錯誤を繰り返しながら、ついに研究発表するまでになった。「生徒が主体的に感受し、言葉で表現する鑑賞」の授業は新たな試みであり、その難しさを実感した。レポート作成までの道のりは、生徒にとっては大変難しかったようであるが、持ち前の探究心と集中力で内容の濃いものを仕上げることができた。

分析後、「スッキリした」という感想を聞いた時、この教材をやってよかったと思うことができた。

今回、お忙しい中をご指導いただいた先生方に、心より御礼申し上げます。

クラス 氏名

チェンバロの音色に魅せられて

～トッカータの魅力から器楽の原点にせまる～

☆チェンバロの音の印象は？

♪Prelude in C: The well-Tempered clavier Book I

☆ピアノの原点とも言われるチェンバロ！！しかしその大きな違いとは？

※チェンバロ(独) = ハーフシコード(英) = クラフサン(仏)

「トッカータ ホ短調 BWV914」を聴いてみよう

トッカータとは？

☆形式

[前奏]

[第1フーガ]

[間奏]

[第2フーガ]

☆第2フーガは曲全体の総決算！！

*8回のテーマがどこにあるか、確認しよう

- ①提示 ②6度から3度へ ③3度から6度へ ④高音 ⑤一番せつない
- ⑥低音 ⑦ラストへ向かう準備 ⑧オクターブのラスト

*8回中、どの部分がポイントとなるか？

*このポイントとなる部分が、他のテーマと異なる点は何か？

*8回のテーマに共通することは何か？

完全4度の幅で下行する音型・・・「
」を表す

低音で()・・・「
」

喜怒哀楽・・・「
」

これを表現するのにどのような音楽がふさわしいかを探究(マッテンソン)

→「
」

マッテンソン(独・作曲家)

・・・オペラ歌手だったが、難聴になったため執筆活動に転向

*マッテンソンらは調による様々な性格の違いを見出した。

☆バッハ一族は代々教会音楽家(ルター派)

「カトリック」

「プロテスタント」

信者の祈りを教会が仲介して

信者が神に直接祈る

神へ届ける

バロック時代に「拍子の確立」と「調性音楽」が誕生した

	ルネサンス	バロック
拍子		
調性音楽		